

スタンダード研究会会報

(2010) No. 20

2010 05. 29

目 次

研究会発表要旨	
・ スタンダード研究者、大岡昇平（ジュリー・ブロック） … 2	
・ 『ローマ、ナポリ、フィレンツェ（1826）』、『バイアーノの修道院』、『ローマ散策』間に見るパズルの性格 検閲下で思想をいかに表すか？（山本 明美） … 3	
・ 「外テクストの戦略 『アルマンズ』について」（田戸 カンナ） … 9	
セミナー報告（杉本 圭子）	… 10
講演会要旨（山本 明美）	… 13
会員活動報告	… 17
編集後記	… 18

【研究発表要旨】

第 52 回研究会 (2009 年 5 月 23 日 中央大学)

スタンダール研究者、大岡昇平

ジュリー・ブロック

『野火』などの作品で知られる小説家の大岡昇平は、同時に優れたスタンダール研究者でもあった。研究者としての大岡の活動は次の三つの時期からなる。戦時下の濃密な雰囲気のもとで『パルムの僧院』を主要な対象としていた第一期、より俯瞰的なヴィジョンを獲得し、『赤と黒』の劇作化、『スタンダールの生涯』へとつながってゆく戦後の第二期、そして『アンリ・ブリュラーの生涯』に注目し、「エゴチスム」、「自伝的物語」の問題へと関心をうつしてゆく第三期である。なかでも本研究は、こうした研究活動の最晩年に大岡が若かりし頃の読書体験に立ち戻り、自身の「読むこと」と「書くこと」を結びつけようとしていた点に注目したい。大岡にとってスタンダールは、愛するが故に決して語りきることのない対象であった。晩年の大岡はそうした両義性に真摯に向きあう作業を通じて、創作のかたちをとった自伝的物語という豊饒な世界を切り開いてゆくのである。

☆ ☆ ☆

Ôoka Shôhei, Stendhalien

Ôoka Shôhei est très connu comme romancier, mais il était aussi un grand stendhalien. Il divise lui-même sa recherche stendhalienne en trois périodes : celle de l'avant-guerre, où il découvrit *La Chartreuse de Parme* et lui consacra de nombreux travaux, celle de l'après-guerre, marquée par sa lecture d'Aragon et de Liprandi, où il écrivit le scénario d'une pièce de théâtre intitulée *Le Rouge et le noir*, et enfin celle de la fin de sa vie, où il s'intéresse, à partir de la *Vie de Henry Brulard*, à la thématique de l'autobiographie. Dans son dernier article, intitulé « On échoue toujours à parler de ce qu'on aime, qu'il a laissé inachevé, Ôoka lui-même s'interroge sur ce parcours de lecture qui a traversé toute sa vie. Lecteur de Stendhal, il déchiffre à travers ses études stendhaliennes les raisons pour lesquelles cet écrivain le fascine. Comme auteur, il partage avec Stendhal un monde qui se reflète dans le miroir de ses romans.

autel au fond. Stendhal dit que Saint Pie V « qui établit la congrégation chargée de scruter les travaux de l'esprit » est l'auteur qui rappelle de nouveau « l'Index » « dès 1826 », en commentant Sixte-Quint comme « le seul homme supérieur qui ait occupé la chaire de saint Pierre, depuis que Luther a fait peur aux papes » dans les *PR* (V, 80), pour ne pas dire comme protestant, mais au moins comme homme qui soutient l'« examen personnel ».

Quant à la Madone col bambino « vis-à-vis » de la basilique dans les *PR*, Stendhal dit que « plusieurs fois la foudre a eu l'insolence de la frapper », en ajoutant que « Le vulgaire n'y voit rien que de commun » pour indiquer au lecteur la manière de voir. Il surnomme « paratonnerre » les « précautions » contre la censure (VI, xcII), ce qui nous permet de supposer que cette « foudre » soit la censure par le Vatican. C'est en mettant en italique l'enfant Jésus tel qu'on voit « Madone col bambino » (V, 320), on comprend qu'il suggère que la foudre de la censure frappe Jésus lui-même. Le Vatican venait réellement de mettre à l'Index son *RNF en 1817*, le 4 mars 1828², justement à cette époque où Stendhal, préparant ses *PR*, le quatrième édition de son ouvrage puni, ne peut pas ne pas y critiquer l'Index. En bref, il s'assimile à l'enfant Jésus, ainsi qu'à Sixte-Quint « vis-à-vis » de l'inquisiteur dans *RNF(1826)*.

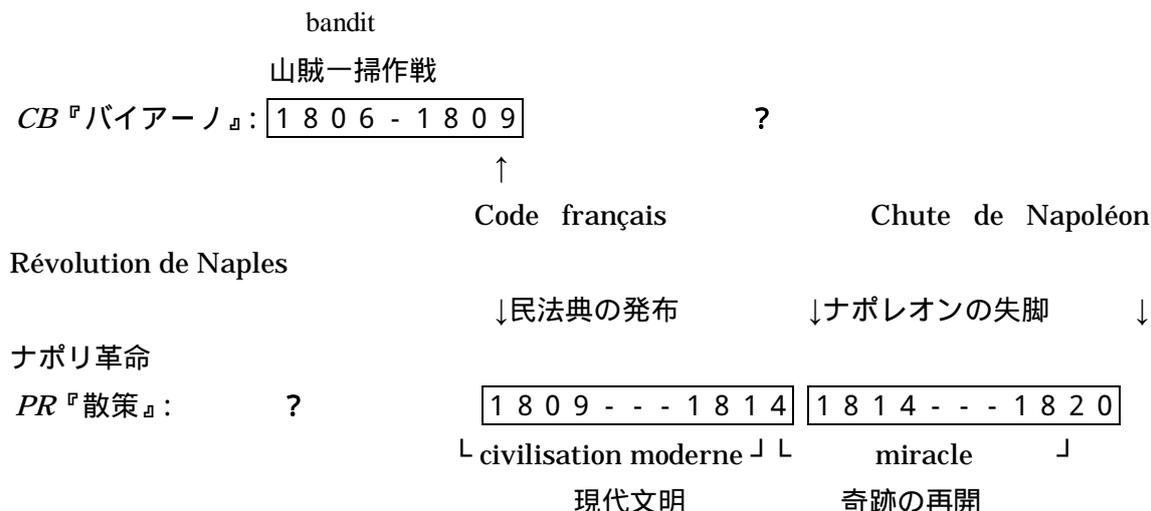
Ainsi rattachées ces deux proportions par « vis-à-vis » comme des pièces de puzzle. Stendhal s'instruit du *Discours de la Méthode* de Descartes pour avoir sa façon « mathématique » de suivre le fil des pensées (XXXIII, 155). Autrement dit, en suppléant l'opposition entre deux papes par celle entre la basilique et la Madone col bambino, notre écrivain met en relief le scepticisme à l'égard de la « congrégation » et de l'« Index ».

2 . *CB* et *PR*

Entre le *CB* et les *PR*, on remarque pareil caractère de puzzle parmi trois années de tournant historique soulignées : 1806, 1809 et 1814. Dans le *CB*, l'auteur, J...C....o lie les années 1806 et 1809, c'est-à-dire, l'année où Napoléon a mis le territoire impérial en Italie et celle où s'introduit le Code français pour le dire 2 fois, tandis que Stendhal, lui aussi, dans les *PR*, lie les années 1809 et 1814, l'année de la chute de Napoléon pour le mentionner 2 fois. En bref, le *CB* souligne l'époque préparative et les *PR* celle du gouvernement, voire même de la « civilisation moderne » (VI, 107). Voici un tableau chronologique qui synthétise ces vérifications. Ce qui attire notre attention, c'est qu'il n'y a point l'année 1806 dans les *PR*, point celle 1814 dans le *CB*. Ces deux lacunes des années importantes sont d'autant plus curieuses que les deux ouvrages bonapartistes ont en commun de critiquer l'union de l'Église et de l'État et d'apprécier le Code français

2 Henri Martineau, *Le Calendrier de Stendhal*, 1 vol. Le Divan, 1950, p.235.

introduit en Italie. Mais c'est là le caractère de puzzle.



Voilà le CB aussi que le RNF(1826) complétés par les PR. Reste le décodage de J...C....o, pseudonyme de l'auteur du CB qui a 4 lettres cachées à chaque deux intervalles que forment les 3 lettres. J'y vois « Jésus Cristo » en deux langues, français et italien, comme Stendhal invente pour son épitaphe : « Arrigo Beyle »(XXXVI,174). Ce décodage rend possible un message : la foudre vise non seulement Jésus Christ et Stendhal, mais encore l'auteur du CB qui conteste contre le régime politico-religieux par l'histoire du couvent. Cela doit être aussi un puzzle lancé au future lecture.

☆ ☆ ☆

『ローマ、ナポリ、フィレンツェ (1826) 』、『バイアーノの修道院』、

『ローマ散策』 間に見るパズルの性格

検閲下で思想をいかに表すか？

0. パズルの性格

デル・リットがスタンダールを『バイアーノの修道院』の著者 J...C....o とし
て否認するのは裏腹に、『バイアーノ』の主要部分である「16世紀年代記」を
他のスタンダール作品となんら変わらぬ体裁で『スタンダール全集』に収録し
て既に40年以上経つ。ここではスタンダールの『ローマ散策』が彼の『ローマ、
ナポリ、フィレンツェ (1826) 』をリレーするように、『バイアーノ』をリレー
しているのを見る。このようなジクソーパズルの性格は、定説となった剽窃論
では説明ができない。彼が『散策』を出版したのが1829年9月5日で、8月22
日に出た『バイアーノ』のほんの2週間後であることを強調しておこう。

1. 『ローマ、ナポリ、フィレンツェ (1826)』と『散策』

『RNF (1826)』と『散策』間のパズルのような補足関係は、サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂内外の彫像間の対向に認められる。我々の作家は、『RNF (1826)』では二人の教皇の対向を、『散策』では同聖堂と聖母像の対向に言及している。

『RNF (1826)』で向かい合う二人の彫像とは聖ピウス 5 世とシクストゥス 5 世である。聖ピウス 5 世像は聖堂の奥から正面玄関へと並ぶ身廊の柱列が形成する直線と平行に正面玄関方向を向いているのに対し、シクストゥス 5 世像は奥の祭壇方向を向いている。スタンダールは、聖ピウス 5 世が「精神活動の詮索に携わる修道会を設立」し、「禁書目録」を「1826 年」再び想起させた元凶であると述べているのに対し、シクストゥス 5 世を「ルターが教皇たちを恐怖させて以来」「聖ピエトロ大聖堂の説教壇を占めた唯一の優れた教皇」として述べ、新教徒と言わないまでも、「個人検討」に耐える人物として『散策』で解説している。

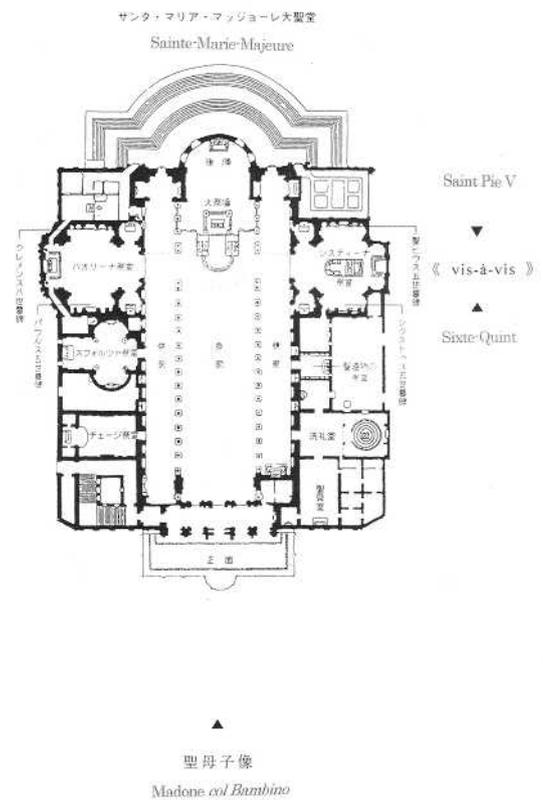
その『散策』で同聖堂と「向かい合う」聖母像に関してスタンダールは「無礼なことに雷が幾度も落ちた」と述べ、「俗人はそこにあたりまえのものしか見ない」と言い添えて読者に見方を指示している。彼は検閲に対する対策を「避雷針」と呼んでいるので、雷は教皇庁による検閲と想定できる。「聖母子像」とあるように幼子イエスをイタリックで強調することによって、検閲の雷はイエス自身に落ちたと暗示しているのが分かる。実際 1828 年 3 月 4 日教皇庁がスタンダールの『RNF(1817)』を禁書処分にしたばかりであり、まさにこの時同紀行文シリーズ第 4 版にあたる『散策』執筆中だった作家は、同書でこの禁書処分に抗議せずにいらなかったのである。つまり彼は『RNF(1826)』で宗教裁判官と「向かい合う」シクストゥス 5 世と同様、イエス像にも自分の立場を仮託している。

こうして「向かい合わせ」による二つの比例式がモザイクの断片のように繋がる。スタンダールはデカルトの『方法序説』から思考の“数学的”構築法を学んでいる。換言すれば、我々の作家は二人の教皇の対向を大聖堂と聖母子の対向で補うことで、「修道会」や「禁書目録」に対する懐疑精神を際立たせている。



サンタ・マリア・マッジョーレ教会正面

(スタンダール『ローマ散歩』Ⅱ、白田結訳、新評論)



2. 『バイアーノの修道院』と『散策』

『バイアーノ』と『散策』の間には、歴史の転換点として強調されている1806年、1809年、1814年の3つの年の間にこのようなパズル的性格が認められる。『バイアーノ』で著者 J....C.....o は1806年と1809年を、即ちナポレオンがイタリアに皇帝領を置いた年と民法典を導入した年を結んで2回言及し、『散策』で

はスタンダールもまたその 1809 年とナポレオンの失脚した 1814 年を結んで 2 回言及している。要するに『バイアーノ』は準備期を、『散策』は統治の、いや「現代文明」(VI,107)の時代とさえ強調している。このような検証をまとめると以下の年表ができる。目を引くのは、『散策』は 1806 年に全く言及せず、『バイアーノ』は 1814 年に全く言及していないことである。両書はボナパルト主義的で、政教一致に対して批判し、イタリアに導入された民法典を評価する共通点をもつだけに、重要な 2 つの年の欠落は奇妙である。しかしこれこそパズルの性格である。

以上、『散策』は『RNF』(1826)と同様に『バイアーノ』も補完している。残るは『バイアーノ』の著者の偽名 J...C...o の解読。3 つの文字が形成する 2 つの間隔にそれぞれ 4 つの省略文字がある。私はスタンダールが墓碑銘に自らの名前を「アッリゴ・ベール」と考案したのと同じようにフランス語とイタリア語の二ヶ国語からなる「イエス・キリスト Jésus Cristo」と見る。この解読で、雷はイエスやスタンダールばかりではなく、修道院物語によって政教体制に異議申し立てをする『バイアーノ』の著者も狙っているというメッセージが可能になる。これもまた未来の読者に投げかけるパズルに違いない。

2009年12月26日 第53回研究会（京大会館）

外テキストの戦略 『アルマンス』について

田戸 カンナ

周知のように『アルマンス』は、ジェラルド・ジュネットが言うところの「外テキスト」(hors-texte, extra-texte) (Gérard Genette, *Figures II*, Points, 1979, p.174) を持つ小説である。これまで研究者たちは外テキストに対してさまざまな態度をとってきた。しかしながら、それらの多様な態度にはいずれも問題があるように思われる。

外テキストを検討していくにあたっては、まずはスタンダールが読者に性的不能が分からない作品を敢て提示したことに注目しなければならない。そして次に、問題の外テキストが手紙と特製白紙挿入本であるという事実を重視して、スタンダールはなぜそうした類の書き物の中でオクターヴが性的不能であると敢て明言したのかに注目したい。

19世紀はじめは、故人が書き残した書簡、しかももともと文学作品として書かれたのではない私的書簡が次々と出版、再版され、これは一種のブームとなり、人々の書簡に対する関心が高まった時代であった。故人が書き残した数多くの私的書簡が次々に出版されるのを目のあたりにし、実際に刊行されたそうした書簡を重要性を認識しつつ読み、しかも過去の作家たちの未だ刊行されていない書簡が出版されることを期待していたスタンダールは、私的書簡であるメリメとシャープへ当てたそれぞれの手紙がいつの日か出版されるのを当て込み、それが出版された時に読者の、作家及び『アルマンス』理解に与える影響を前もって想定していたのではなかったか。

一方でスタンダールは、遺言において譲渡できるもの全て、所有品全てを指定の者に遺贈するとしばしば明記している。遺贈する物品の中には当然蔵書も含まれるであろうし、またそのことをスタンダールは明記してもいる。スタンダールは自分の蔵書を遺贈するという考えを既に表明した上でブッチ本の余白及び白紙ページに修正、メモ書きを記し始めたわけであり、とすると彼は死後ブッチ本が廃棄されたり紛失することなく指定された者の手に渡って保管され、さらにはいつの日かその修正、メモ書きが世に出るよう仕組んでいたとは考え

られないだろうか。

スタンダールは、読者には性的不能が分からない小説を意図的に提示しており、その一方でメリメ及びシャープへ当てたそれぞれの書簡とブッチ本がいつの日か公になること、また公になった時にこれらの書き物が作品の読みに大いなる力を発揮することを予め想定しており、さらにはメリメへ当てた書簡とブッチ本についてはそれらが世に出るよう積極的に計らったと考えられ、この意味においてオクターヴの性的不能をメリメ及びシャープへの書簡、ブッチ本で明かしたのは紛れもなくスタンダールの創作の領域内での所作であり、小説づくりの一環だったのである。

【セミナー報告】

«Rééditer Stendhal» (2010年3月27日 於ソルボンヌ大学)

杉本 圭子

パリ第三大学およびソルボンヌ大学の19世紀文学研究チーム主催の、博士課程の学生向けセミナーである。月に一回、ある作家に焦点をあてる形で開催されており、3月はスタンダールについてということで、私も近年の日本におけるスタンダール再訳の試みについて報告した(すべての翻訳がいわゆる「校訂版」にあたるかどうかは微妙な問題ではある。おそらくやり方にもよるであろう)。

発表者は私を含め四名で、フランソワ・ヴァヌスチュイズ氏(パリ第3大学)による導入のあと、セシル・メナール氏(グルノーブル大学)から、グルノーブルの草稿研究チームによる電子校訂版編纂作業の概要が紹介された。先だってグルノーブル市立図書館が購入した青年時代(1801年-1813年)の「日記」や旅日記、未完の劇作・小説作品の草稿およびそのトランスクリプションは、すでに開設されている <http://stendhal.msh-alpes.fr/manuscrits/> のサイトで閲覧することができる。チームの地道な努力の結果、データは1000枚分を超え、必要に応じて資料についての解説も加えられている。今後は『ラミエル』、『リュシヤン・ルーヴェン』のような未完の大作の草稿や、未出版の読書ノート、スタンダール自身による抜き書きなども作業の対象になるということである。

この電子化作業の大きな目的は、なによりもコレクションの中身を正確に把握し、たびたびの閲覧によって草稿が劣化するのを防ぐこと、われわれのような遠隔地に住む研究者にも草稿の閲覧を可能にすること、そして一般の読者に

も広くコレクションの存在を知らしめることにある。作品の草稿に関しては、すでにジェラルド・ラノー、イヴ・レセ、セルジュ・リンケスらによるデータの蓄積（『アンリ・ブリュラルの生涯』、『ラミエル』）があるとはいえ、スタンダール自身による推敲、加筆、削除、さらにロマン・コロンの加筆の跡を画面上で段階を追って示すというような作業を可能にするためには、データベースの開発をはじめ、精緻かつ高度な技術が必要とされることは言うまでもない。いつ終わるとも知れない、複雑な作業を日々続けている研究チームの面々には、ただただ頭が下がる。

発表では作業をすすめるうちに明らかになってきた問題点が提示された。その最大のもは青年時代の『日記』の扱いに関するものである。従来、私的な内容の記述はデル・リット編纂のプレイヤッド版 *Oeuvres intimes* (2vol.)に、読書や芸術鑑賞、創作に関連する記述は同じ編纂者の手によるビブリオフィル版全集の *Journal littéraire* (t. I~III)におさめるという分類がなされてきた。ただ実際には同じ紙片に両方の性質の記述が混在していることも多く、またスタンダールという作家の資質を考えてみれば、そもそも両者を切り離すこと自体が無意味であると言わざるをえない。しかもデル・リットの校訂版では、日付の判明しているものについては時系列を厳密に守ろうとするあまり、私的なつぶやきがたとえば家計簿的なメモによって分断されるというような不都合が起きてくる。また、ある文学的な考察が装飾的な大きめの字体で書き始められ、将来的になんらかのまとまった形をとることが予想されるような場合でも（例として挙げられたのは、メランコリーについての断片的考察）、紙媒体では他と区別のつかない通常のフォントに直されているために、その重要性を見落としてしまうということがある。デル・リットによるかの有名な分類、«journal brut» / «journal reconstitué» についても、新たな問い直しをする必要がある。

また、内容的に分類のつかない紙片や、取り上げる価値があるかどうか疑わしいもの（ポーカーの結果表など）、過去の整理作業の過程で断裁されたり、本来とは違った位置に貼り付けられたりした紙片も多い。700枚を超える演劇に関するメモにも、私的な記述と演劇に関する考察、文体に関する考察などが複雑に入り組んでおり、頭の痛い問題である。

この電子化の作業は当然のことながら、将来的には紙媒体による出版を想定している。ただし、その場合にも専門家向けに限るのではなく、一般の読者が目を通して楽しめるような読みやすい形式を心がけるべきであるという。まだまだ課題は多いとはいえ、パワーポイントを駆使したメナール氏の説明は具体例に富み、非常に説得的で、今後の作業の進展がいつそう楽しみになった。

次いで、近年出版された *Oeuvres romanesques complètes* («Bibliothèque de la Pléiade») の第一巻、第二巻の校訂を手がけたグザヴィエ・ブルドネ氏（ソルボンヌ大学）とイヴ・アンセル氏（ナント大学）による発表があった。ブルドネ氏は未完の『リュシヤン・ルーヴェン』について、作者自らの手になる草稿と、

その一部に修正を施した口述筆記の部分(«*Le Chasseur Vert*»)とを、従来のプレイヤッド版(マルティノー校訂)のように混ぜるのではなく、むしろチャンピオン版(ドブレ校訂)のようにそれぞれ独立させて掲載する形式をとるに至った経緯を述べた。これはひとえに、スタンダールの残した作品をできるだけ原型に近い形で再現したいという意志に基づくものである。しかし一口に草稿といっても、まったくの素描に近いものもあれば、数度にわたって加筆、訂正の施されているもの、まるごと削除の対象になっているものなど、さまざまな段階のものが混在している。しかも例によって、草稿には創作の過程をたどるための重要な資料であるマルジナリア、口述筆記部分には校訂者ロマン・コロンの加筆がある。そこで、マルジナリアについては脚注(プレイヤッド初の試みということで、粘り強い交渉が必要だったとのこと)、それ以外は後注で処理した。さらに従来の校訂版とは異なり、草稿の途中で止まってしまっている章立ては中断したままにし、政治的な符牒もそのままに残した。その結果、『リュシヤン・ルーヴェン』は切れ切れの、物語の断片の集積として立ち現れる。ただしこうした形式を通じて、19世紀の人々がミシェル・レヴィ版によって目にしていた『リュシヤン・ルーヴェン』(すなわち『緑の獵人』の部分)をそのままに示すことができると同時に、スタンダールが決しているいつの場合にも同じように書いていたわけではなく、出版を前提にしている場合と、していない場合では異なったエクリチュールを使い分けていたという事実を明らかにできるという。

続くアンセル氏の発表は、プレイヤッド新版『赤と黒』が、現代の読者にとっての読みやすさを強く意識したものであることを強調した。氏によれば、昨今のフランス人の若い学生にとって、『赤と黒』のような古典テキストは文字通り謎に満ちており、しかも彼らはタイトルの「赤」は「軍服」、「黒」は「僧服」の象徴であるというような紋切り型を信じこんでいる(実際にはフランス軍の軍服が赤かったためではなく、「赤」はむしろイギリス軍の軍服の色である)。このような状況において、専門家による従来の校訂版において重視されていた「モデル探し」の作業(たとえば、シェラン神父のモデルとなった人物についての情報)などは全く意味がなく、それに代わってリュシヤン・フェーヴルの提唱した「知的道具立て」(outillage mental)と呼ばれる要素 起床や就寝の時間などの生活習慣や、髪型、服装をはじめとする風俗、検閲制度や年金に関する情報などを注釈にもりこむべきであるという。実際、アンセルの校訂版の注には近年のアナール派の歴史学、社会学の成果が多くとりこまれており、かつて『赤と黒』の理解に多大な貢献をしたといわれるカステックスのクラシック・ガルニエ版(1973)を補う重要な版であると、個人的には認識している。

最後に私(杉本)が光文社現代文庫版の野崎歓訳『赤と黒』(2007)がひきおこした反響と批判にふれつつ、この翻訳がプレイヤッド新版を底本とした最初の翻訳であることに注目し、校訂版の活用という観点から、アンセルが注にも

りこんだ具体的な「知的道具立て」をもっと積極的に注釈や本文の訳語選択に取りこむことで、現代の読者がより深く小説の細部を理解することが可能になったのではないかと提案した。

ヴァノスチュイズ氏の総括にもあったが、全体の傾向として、昨今の校訂作業はスタンダールの残したテキストを可能な限り忠実に再現しようとする点で共通しており、そのことと、一般読者にも扱いやすい版を実現することをどう両立させるかが、今後の大きな課題となっている。さらに、研究者の世代交代が進み、女性の研究者も増えて、昨今のスタンダール研究が、ときにホモソーシャルな色彩を帯びることのあった「ベーリズム」から乖離する傾向もまた著しい、という興味深い指摘があったことも付け加えておこう。

【講演会要旨】

Francis Claudon(Paris XII) : « Beyle et Haydn »
(2009.11.9 於 早稲田大学 / 11.18 関西学院大学)

要約：山本 明美

Résumé par Akemi YAMAMOTO

ベールとハイドン

19 世紀初頭に名声の確立していたハイドンはフランス軍のウィーン滞在中に亡くなったが、芸術家としてのスケールの大きさから政治問題に巻き込まれた。スタンダールの 1809 年の滞在は『ハイドン、モーツァルト、メタスタジオ伝』に感動醒めやらぬ素材をもたらした。カルパーニと同様、スタンダールも多彩な出版や研究の中に位置づけ直さねばならない。この時代のハイドン現象はどんなイメージをもっていたか？ハイドンがスタンダールに及ぼした影響とは？これらの問題をハイドン [1732-1809.5.31] 没後 200 周年に振り返る。

ウィーンにおけるナポレオン軍

ナポレオン第二次ウィーン遠征 (1809.5.10-12) に加わったベールとハイドンの接点を見よう。ベールはヴィヴァン・ドゥノンに伴ってハイドンに哀悼を捧げた。フランス学士院の一員であったドゥノンと同様、ハイドンも 1801 年に同院の外国会員として任命されていた。これはフランス軍の計算された宣伝行為であり、1805 年にはオステルリッツでオーストリア軍を破っている。ナポレオン軍衛生班に配属されていた紀行文作家で薬剤師のカデ・ド・ガシクールが 1818 年パリで出版した『オーストリア、モラヴィ、バヴィエール紀行』には、

ダリュモベールも匿名ながら「王宮の長官」と「帝国の支出係」として現れ「大きな藁のベット」を共にしたとある。

1809年5月フランス軍はウィーンに侵略すると印刷機と情報手段を奪取し、『ウィーン新聞』をドイツ語によるナポレオン軍の会報にした。これに対抗するため、オルムート(今日のチェチェン共和国のオロモウク)に退却したオーストリア政府は『オーストリア新聞』を創刊し、スタール夫人の友、フリードリヒ・シュレーゲルが編集を主宰する。同新聞はハンガリー地主らに対するフランス軍による破壊を報じ破廉恥な略奪を告発している。同年8月中旬の記事は、皇帝フランソワの臣下であるハンガリー人解雇を目論むフランスの陰謀を皮肉る。結果は目論見の正反対だったからだ。ベールは7月下旬に告白するように同作戦の中心人物の一人であった。ナポレオンがハンガリー王国の玉座にいたハプスブルグ家にとって代わろうとしていたエステルハーゼ家の社会的、芸術的、政治的重要性を評価し、その宮廷楽長であったハイドンの国際的性格を強調するのも作戦の一環であった。

ハイドンとフランス軍

5月10日フランス軍の爆撃が始まると、ハイドンの住んでいたマリア・ヒルフ教区界隈に落ちた。驚きから覚めるとハイドンは彼自身が数年前に民衆のリート[ドイツ歌曲]によって作曲した帝国楽曲を演奏し続けたが、シュレーゲルの新聞と同種の愛国心の意思表示と思われる。砲撃後の占領でフランス軍はハイドンに軍人を宿泊させる義務を免除し、クレマン・スュルミ大尉は5月下旬にハイドン宅を訪れて『天地創造』の曲を歌ったが、それはジュゼッペ・カルパーニによるイタリア語訳であった。ボナパルトの立ち会ったこのオラトリオ[聖譚曲]の最初の演奏が行われたのは1800年12月の晩であった。この発表会に列席していなかったベールは、1811年4月に恋人アンジェリーヌ・ベレーテルが歌う再演で『天地創造』を聞き、「よい音楽は私の誤りを気づかせてくれる」と述べている。

フランスにおけるハイドン受容は極めて重要な現象であった。1801年7月「モントゥール」はハイドン作曲の不朽の名作『天地創造』を演奏するため芸術劇場に集まったフランス人芸術家らが、天才に対する正当な称賛の念に浸ったと述べている。『ハイドン伝』がベールとカルパーニの論争になるずっと以前から皆がハイドンを知っていた証であり、ベールがハイドンを知ったのは単に流行の結果にすぎなかった。1802年3月上旬の日記からもハイドンは若いベールの日常的な現実には溶け込んでいたことが分かる。1810年6月中旬の日記には他の芸術家とともにハイドンに関しても著作計画を立てているが、ベールが同年6月下旬に「主題はハイドンの第八交響曲のようにへ短調で扱われるべし」と記した書付は厄介な問題を提起する。初期の伝記執筆者らはハイドンの作曲目録を添えているが、文脈や状況から見て勿論概略的で、演奏協会、逸話の語り手、

ハイドンの自称友人たちにとって魅力もあり勝手な解釈もある。つまりハイドン現象があったのであり、カルパーニとボンベは舞台上がって彼らの節を歌うことができたのだ。

ボンベ対カルパーニ

1809年にハイドンの作品は数多く演奏された。ベールがカルパーニを嫌っていたに違いない事実をリチャード・コーが強調したのは尤もである。カルパーニはハプスブルグ家に抱えられたイタリア人にしてヴェニス劇場の検閲官であり、ナポレオンや自由主義者の公然の敵である。カルパーニは、逃亡者で臆病者で意地の悪いデル・ドンゴ侯爵に似ている。ところで、ロベール中尉が彼の目を盗んで侯爵夫人と子供を作ったように、ベールはカルパーニから遠慮なく、その音楽観やハイドンに関する正確な知識を盗んだ。リチャード・コーやシュゼル・エスキエは、カルパーニの音楽理論が実際にスタンダールの思想になったと何度も主張するが、『恋愛論』におけるデスチュット・ド・トラシー、あるいはフォリエルの場合とどのように違うのか？この場合誰も剽窃を告発しなかった。ベールがその豊富で複製された源泉に明瞭で個人的な観点を付け加えているからである。カルパーニは諸々の首都のサロンや政府新聞に通じている文学者であり、ラ・アルプやモレレのような人物と見られる。ベールはディレクタントとして自己紹介する。彼が、「文明化した社会で話し手が虚栄心の喜びから十分な収穫を期待するのは、話の本質ではなく、語り方である」[手紙7]と述べるように、『ハイドン伝』には田園の新鮮な一種の香りが漂っている。こうしてベールが『四季』のいくつかの節を思い出す時、彼はカルパーニよりもずっと繊細で『ルーヴェン』のナンシーや森の場面の雰囲気やトーンに波及している。このようなトーンはカルパーニにはない。ベールは聞き手を想定しつつ、ハイドンを人間的にするのであり、出来事を小説に変える。ベールはカルパーニの語を用いながら、凝縮し生気を吹き込み人間的なものにする性格を処女作から示している。

ベールはウィーン貴族の気さくな態度について語っているが、有名な音楽友の会はこうした芸術家によって1812年自費で設立され今日に至るまでウィーン芸術の極めて格別な大黒柱となった。カルパーニにとってのクラブ員、スノッブ、金融家団体は、ベールにとっての愛すべきディレクタント協会となる。明らかに歴史的事実、知的なデータは残るが、ベールはカルパーニが雑然と感じていたこと、つまりイタリアの旋律的な音楽と、ドイツの調和的で対位法的な音楽との対比について説明が錯綜しているのが分かる。彼は啓蒙思想のよき読者らしく芸術に応用された気候理論を急進化する。

結局ベールはカルパーニの見解に全面的に従っている訳ではない。ベールが『ルーヴェン』について書きとめた恋愛の展開プランは、ハイドンの交響曲から着想していてもカルパーニの正確な解説を度外視している。

私はベールがウィーン古典主義黎明期にあったハイドンの音楽に現代性を嗅ぎ取ったと理解している。私はベールが『ハイドン伝』をしめくくるにあたってカルパーニの文を再び取り上げて、ハイドンが具現化した芸術の進歩を強調しているが、ベールのペンにかかれば、同じ文章がきわめて自由に言い換えられ、異なる響きになり、意図が変わり、強調した語のお陰で、明らかに軽快で進歩的になる。それは1809年のウィーン滞在の重要性と滞在経験に基づく著作のプライドに発している。

【会員活動報告】2009年4月1日～2010年3月31日

田戸 カンナ

「コントラストの構図ースタンダール『アルマンズ』の最終章についてー」、『学苑』第823号、昭和女子大学、2009年5月、p.13-24.

「スタンダール『アルマンズ』とイギリス」、『英文学会誌』第44号、和洋女子大学、2010年3月、p.97-110.

南 玲子

博士論文「スタンダールの《民族学》 — 《人間研究》から《文学的創造》へ—」

(L'«ethnologie» de Stendhal : de l'«étude de l'homme» à la «création littéraire»)

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、2009年7月受理。

山本明美

«Une nouvelle traduction du *Rouge et le Noir* en japonais », *H.B.* n°13-14. 2009年10月、p.329-332.

✎ 編集後記 ✎

『会報』第20号をお届けします。1990年の研究会の発足と同時に第1号が発行された本誌も、はや20号を迎えました(研究会も20周年です!)。ここまで一号も欠かすことなく、貴重な活動の記録を残してこられた初期からの会員の方々に、心から感謝の意を捧げたいと思います。

この記念すべき年に後平隆先生からバトンタッチし、再び編集作業にかかわることになりました。どうぞよろしく願いいたします。小林亜美さんのご協力をえて、研究会ホームページへの『会報』原稿の掲載も、引き続き行います。

『会報』バックナンバーについては、皆さまのご協力により第2号(1992年3月発行?)以外はすべてホームページ上で読めるようになりました。第2号の現物をお持ちの方がいらっしゃいましたら、杉本までご一報いただけますと幸いです。

今号について。ご本人のご希望により、ジュリー・ブロックさんと山本明美さんの発表要旨は日仏両言語で掲載しました。フランス語での原稿執筆や、活動報告欄の著書や論文のフランス語タイトルの記載についても、『会報』の統一感を損なわない範囲で、できるかぎりご本人の希望を尊重していきたいと思えますので、今後の『会報』のありかたを含め、意見をお寄せ下さい。

杉本 圭子

cypresdujapon@mpd.biglobe.ne.jp

- * 迅速な情報交換を目的としたメーリングリスト(ML)も引き続き稼働中です。新たにメールアドレスを取得された方は、杉本までご一報ください。